Ibaraki Christian University Library

茨城キリスト教大学紀要第55号　123
人文科学　p.123～135

ウォルフガンク・シャーデヴァルト
近代技術の世界と古代ギリシャの文化理念（1965年）

Wolfgang Schadewaldt
Die Welt der modernen Technik und die altgriechische Kulturidee,
aus: Wolfgang Schadewaldt, Hellas und Hesperien, Bd. 2., S. 485-497.

掛　川　富　康

Für meine Tübinger Lehrer und Freund
Hans Krämer, Hubert Cancik
und Reinhard Breymayer

1.

わたしたちの近代的-産業的技術は，今日の観察者に，いわば二重の相貌を示している。一方では，この技術の中に，パラス-アテネの，あの活動的なアテナ-エルガネの明瞭で，先鋭的で，有益な動向に視線を向ける。このアテナ-エルガネは，かつては，今日においてもきわめて良く保存されているヘパイステイオンの中で金細工の神とともに同じ神殿の中で，祭儀と立像を所持していたが。にもかかわらず，この女神の胸当てからは，蛇に巻かれたゴルゴンの頭部が，この観察者を凝視している。

このように視線が二重であることに応じて，今日の人間も技術という現象にさまざまな形で反応するようになっている。わたしたちの間では，技術に魅了されたその賛美者は少なからずの数にのぼっている。わたしたちの世紀の，とてつもない技術の進展は，このような人たちを，注目すべき高揚された感情へと誘っている。しかも，他面では，憂慮している懐疑的な人たちもいる。このいわゆる進歩こそは，文字どおり，このような人たちを不安，まさにはっきりとしない不安で満たしている。

にもかかわらず，この女神［= 技術］は，わたしたちの希望や不安をよそに，誤ることのない一貫性をもって自らの道を行進している，二世紀前に，産業革命という，大きな社会的・政治的革命の時代に，それは，機織り機や蒸気機関によって始まるのだが，わたしたち自身が創りあげたものは，以来，大衆社会，政治，経済との闘争を経験し，わたしたちにとり，ますます運命と化してきている。技術は，わたしたちの文明を形成し，そのことによってわたしたちの環境世界を形づくっている。技術は，全地球上に等しく手を伸ばしており，情報伝達や交通の迅速さによって，すべての空間的尺度を縮小させている。

技術は，わたしたちの個人生活の最内奥の領域，わたしたちの感情や思考の中に侵入しつつある。そして，多くの人々によって言われているように，技術はわたしたちに，意識の全体の深刻な変化さえをも要求している。その変化は，ちょうど，氷河時代がそうであっ

たように，自然現象を通してもたらされたり，あるいは，狩猟人や漁師の生活から農民と定住生活への移行のような大きな文化の大変革を通して招来させられたようなものであるかもしれない。

いま述べたことをもって，近代技術は，わたしたちに，新しくはないが，しかし高度に差し迫る問い，世界における「人間」と「人間の状況」への問いを，提起したのである。今日の，また明日の人間は，――それは他の仕方ではあり得ないのだが――新たに生み出される技術－産業の労働の世界に，何らかの仕方で，適合しなければならなくなる。このことは，人間は，このような適合をもって，また自ら技術化された動物に，部分的な機械装置にならなければならないことを意味しているのであろうか。人間はそのような場合，いちだんと自己を完成させていく文明の中で，高度な快適さの中で生存し続けるでろうが，しかし，このような快適さの中では，おそらくは，言葉の十分な意味での人間であることをやめてしまうと思われる。あるいは，しかし，人間には，技術の新しい条件下においても，充分な，全体的な人間として存在することが，可能であろうか？

今，このような文脈で，古代ギリシャの文化理念――この文化理念は，偉大なギリシャの詩，そして哲学によって展開させられてきたのだが――に一瞥を与えることは，わたしたち今日の人間には有益であると思われる。

この古代ギリシャの文化理念は，調和のとれた世界の全体の中での調和的・全体的人間という構想の中で育まれたのであるが，それはまったく遠くにある夢というものではない。近代技術の世界の中にいる人間が，せいぜいのところ，ある種の贅沢として，余暇の時間にかかわるようなものではまったくない。むしろ，近代技術は，根本においては，古代ギリシャの文化理念のなかで，あらかじめ形がとられていたものなのである。しかしながら，この文化理念は，技術というものに，高度に有益な仕方で，文化と人間存在の構造全体の中で自らに帰せられる場所を供給するものなのだ。このような構想は，おそらくは，これまで忘我の激しさをもって進撃してきた近代技術に，苦しくも必要であるものを供給することに力を貸すことができるのである。それは，正しい自己理解と自己限定である。

2.

さて，技術という現象を，すべての非現実的なロマン主義や，すべての不当な陶酔から距離をとって，充分に正しく理解するために，まず言われるべきことは，技術は，それ自体，人間自らがそうであるような，或る「原－人間的なもの」なのであり，技術は，人間の最初の出現とともに到来したのだ，ということである。人間は，動物のように環境世界に確固として順応してはいず，人間一般としてのその特殊なあり方において，自分をとりまくそのままの自然から，特殊に人間的な環境世界を手に入れるように命ぜられている，と自己認識している。このような人間の世界支配や人間的な世界形成の手段こそ，技術なのである。この手段は，はじめ昔の手工品や工芸品という形をとっていた。技術の有する原－人間的な課題，それは，今日に至るまで展開してきた産業技術の根本課題であり続けているのだが，人間の「飾り」に関わるものだ。この「飾り」とは，ただたんに「生きられた」生に対する飾りではなく，真に「導かれた」生に対する飾りというものである。つまり，ただたんに，何らかの仕方で，命をつなげてきた現存在であるばかりでなく養育さ

れた現存在, という意味で導かれてきたと言うことなのである。この「養育」なるものは, ラテン語 cultura の根本の意味である。このような根源的意味での技術は，人間を原初的な自然に漠然と引き渡されていることから解放する。技術は，人間の荷を，下部に位置する多くの副次的な活動から，機械の助けを借りて，軽減させ，いつも緊急事態の中におかれている人間を，そのたんなる無為の生活をこえて，自分自身に，つまり人間の尊厳にふさわしいありかたへと高揚させる。ゲーテの言葉を借りれば，動物はたんに「自らの器官を通して教化される」が，人間は「自らの器官を教化する」ことができ，その器官を技術を通して教化し，拡大し，豊かにし，補強することができるのだ。

人間が荷を軽くするという考え，人間をその尊厳にふさわしい存在へと高めるという考えは，人間に，啓蒙主義時代の時代に，技術的－産業的転回への道のりをもたらしたものであり, 人間に熱狂的な衝動を与えたこともあった。今日もいぜんとして, 技術が, 人間に, 基本的に委託されているという考えは，自らの十分な説得力を持っている。技術は，わたしたちをより良いものにしたり，より幸福にするということはなかったのであるが，技術は, 私たちの生の荷を軽くし, またこの生を高揚させる。それは, 私たちの生を多くの点で, より豊かにし，より教化されたものにする。交通機関の速さのことや，居心地よさ，より良く装備された，より健やかな住居のことを考えるかもしれない。人類のかつての試練であった，あの重苦しい疫病からの解放，技術的に発展した医療を通して私たちの生命への期待を高めること，さらに，知識の拡大が容易なものになったことに想いを寄せる。とくにこの知識が，容易に拡大されたことの結果，技術は，人間と人間との間を橋渡しし，民族から民族へと，また，諸民族の内部にある階級や階層のあいだの橋渡しをしている。とりわけ，地球上の広い範囲にわたる飢え，貧困，病気やさまざまな無知 に抗しての闘争において。私たちの今日の技術も，あの技術の人間的課題を果たしている。だが，技術の精神についてもよく考える必要がある。技術の精神なるものは，精確さ，入念さ，概観する精神であり，明瞭な連関を支配する精神であり，しかも，無条件の信頼や信用の精神のことであることは言うまでもない。

しかしここで，あの像が変化する。女神の高貴な相貌から，とつぜん，あのゴルゴンが，わたしたちを凝視する。技術，それは，人間によって，人間を通して，人間のために，行使されたのであるが，自らの固有の可能性の結果として，突如として，人間に対抗するようになる。原子核や放射能による高度な危険を考えれば，このことはまったく明らかである。原子核や放射能において,「技術の進展とともに，道徳的な展開が同じ歩みを進めなければ」，人間の手中に,「今日の探求が明日の人類の死へとつながる力が，与えられたのである」（マックス・ボルン）。しかしまた，わたしたちの大気汚染，化学製品による水源の汚染，多くの薬物の致命的な誤用，といったことも思い起こす必要がある。──忍びやってくる危険もさらに少なからず憂慮さるべきである。普遍的な「技術化」は，技術の可能性を人間に意義深く使用させなくしてしまう。人間を意志を喪失させられた，その対象物たらしめてしまう。たとえば，ラディオやテレビを通じた情報による影響は，人間を啓蒙するよりも，むしろ混乱させ，さらに，芸術の思想や営みにおいて，自らの固有の活動を窒息させてしまう。あるいは，近代の大衆社会を必然的に統制している装置は，組織や運営の点で，人間を一段と途方もない機能の連環の中のロボットにしてしまう。高度に統制

された世界の対象にしてしまう。あるいは，止むことなく進展する自動化と規律化，それは，事実を記憶するコンピューターの助けをかりて，前代未聞の，力や時間を軽減する成果へと到達する。だが，この自動化と規律化は，いまや，人間ともっとも人間らしいものの上にも波及している(そこでは,力の節約や時間の節約などまったく問題にならなくなっている)。規律化された自由な時間，休暇の過ごし方，規律化された自然の享受，規律化されたギリシャ旅行，規律化された喜び，規律化された幸福，さらに，若い人たちの間では，映画をモデルにして規律化されさえする愛，もつと多くのものを挙げることができよう。おそらくわたしたちは，これらの事態は，次の三つの点に，要約できよう。

第一。技術の原初的な課題は，かつて，人間に対する人間の装備というものであったが，いまや，この装備は，装備する者を装備する活動の奴隷へと仕立て上げている，という結果をもたらしていると思われる。というのも，装備が，途方もないもの，また自立したものになったシステム――そこでは，必要なものが満たされるばかりでなく，必要なものが技巧的に呼び起こされるのだが――の中で，人間はそのシステムの働きを行使し，そしてその働きの役割を演ずる。そして自らが卑小な存在であること,主体であることの代価を,他人のための対象となることによって払わなければならないからである。その結果は，多様な仕方で嘆かわしく感じられる近代人の内面的な故郷喪失，自らの環境世界の中で場所を失ったと違和感を感じることである。

そして次に。技術の根本問題はかつて，人間が原初的な自然に引き渡されていることから解放することであったとするならば，いまや解放は，自然の側からの，自然による疎外へと転倒してしまっている。

そして三番目に。あの技術の根本課題の中には，かつて人間であることに値する存在を可能とすることによって，人間の人格性をも基礎づけ，この人間性に到達したとするならば，いまや，この事実は，正反対のこと，つまり技術の全面的な活動の中での人格の喪失，人間をますますたんなる数字と化す,その非人間化へと転倒させられているように思われる。

オルダス･ハクスレイ［1894－1963］の小説「素晴らしい新世界」は,30年代に出版され,ついさいきん新しい編集のもとに出版されたが，ハクスレイはこの小説の中で，技巧的に誕生させられた人間の，徹頭徹尾規律化された世界というファンタジーを描いている。この完全に規律化された世界の中では，特別居留地で自然のままで生まれ，成長した人間が絶望の叫びを発する。「私は何らの居心地の良さを望まない。私は神でありたい。私はポエジーを欲する。私は真の危険を欲する。自由と徳を欲する。私は不幸への自分の権利を欲する！」ハクスレイの描くこのようなヴィジョンは，今日となっては，たんなるファンタジーの世界ではまったくない。この事実は，1963年に出版された「人間とその未来」というタイトルの書物が証明している。この書物の中では，すぐれた自然科学者たちが，その中には五人のノーベル賞受賞者がいるのだが，まじめになって，「生物学の天才の技巧」は，しょうらい人間を思うがままに造り換えることができるか否か，議論しているのである。たとえば，宇宙飛行士となる将来の人間から，そのためには完全に不必要となり，まさに邪魔になった足が取り去られる，というような。

このようなぞっとするような見方では，技術は，もはや人間に奉仕し，人間を高揚させる道具としては，理解されていない。高度に憂慮すべき，人間の全能として理解されてい

る。人間が純粋に人間として，その単純に存在することが幸福であるというようなことは問題にされない。完成に達した技術世界の人間は，あの昔のプリュギアの王の中にあらかじめ定式化されているように思われる。神はこの王に対して，王が触れるものはすべて黄金になる，という思慮の欠けた願いを満たしたのであるが，この王は，休むことなく増えていく財産に取り囲まれながらも，飢えに脅かされるという結果に終わったのである。

3.

古代ギリシャの文化理念――いまから，この主題に向かっていきたいと思うのだが――も，技術の能力に，人間の力と能力の中にある高度な，疑うことのできない位置を与えている。ホメロスが抱いた製造することや制作するという出来事に対する喜びのことを考えればよい。自然のすべてを任せられたキュクロプス［ギリシャ神話に登場する単眼の巨人］は，ホメロスにとり，なんら真の人間ではない。ヘロドトス［B.C. c.484-c.425］は，バビロニア人やエジプト人の「偉大な，また驚異に値する制作物」に対して生き生きとした関心を抱いている。それは，アトスの切り通し，ヘレスポントス海峡にかけられた橋梁，サモス島の水道のトンネル，のような，きわだった「技術」の成果に対する関心である。アイスキュロス［B.C. 525/ 4 -456/5］は，勝利の報告をトロイアからアルゴスへと報告する，あの火による通信装置について描写し，その作品「プロメテウス」のなかで，この英雄が，いかに，火をもたらしたものとして，原初的な芸術や学問の伝達人として，人間を，暗い洞穴の住人と運を天にまかせた行為から，洞察と理性へと，そしてそのことによって計画性のある行動へと導いたか，について詳細に描いている。

また，ソクラテスも，仮象から解放された確固とした知への探求の途上にいたが，技術者のもとでいち早くこのような知が実現されていたことを見いだしている。――たしかに，技術を行使する人間も，自分たちの限界づけられた専門知から出発して，他のすべての知識を判断しようとしても，失敗に帰するものである。存在と認識のさまざまなあり方に対するモデルとして，「テクネー」という事象が，プラトンその人に有益であったのも，充分な理由がなかったわけではない。わたしたちの今日のヨーロッパ的な「技術」という概念，それが「機械」という概念と同じく，ギリシャに起源をもつものであり，téchne technikós mechané［というフレーズ］に遡るものだとしても，事柄の実体もギリシャに由来するのだ，という指摘が，うえの事実の中には含まれているのである。たしかにそうなのである。たんなる手工品とはちがって，技術は，計画された，規則に支配された生産であり，純粋な探求の上に打ち立てられたものであるが，文字どおり，このように学問の上に基礎づけられた技術は，まず最初に，また根本において，ギリシャ人によって考えられたものである。そして，今日の技術は，他のものからの影響の下で，根本において，或る新しい，自らを巨大なものへと完遂せしめた。

旧来の手工品や工芸品もある種の学問にもとづいたものであるが，しかし，これらのものは主要な点で経験にもとづいている。経験をつみ重ね，着想をつくり，吟味する。そして，これらのことが，世代から世代へと伝承され，増大する手工品のなかで合流する。その原動力となっているのは，「必要性から生まれた問い」であった。純粋にこの問いの途上で，この原動力は，つねに適用というものに方向づけられたままであるが，はやくも，エジプ

ト人の算術や測量術，バビロニア人の天文学のようなきわめて偉大な業績に到達した。

ギリシャ人も，自分たちをとりまいている現実に，力と決然とした姿勢で，現実的に，対峙していった。しかしながら，ギリシャ人にとっては――当時の世界を基準に測ってみると――好奇心にあふれた，理解しづらい頑固さが支配力をもっていた。ギリシャ人のような人間は，実際的な世界の克服と並んで，そして，この克服に先立って，まず，一度そのたびごとに事柄そのものを，存在するそのものを，徹底的に究明することに固執したのである。事物そのものの純粋な認識についての，一見したところ，不必要な程度に形式ばった回り道は，その後で，結果として，正しい存在認識の，そしてまた実践的な世界の克服への近道であることが，実証されたのである。わたしたちの近代の産業技術のまれに見るような成功もこのことにもとづいている。古代の手工品や工芸品は「必要から生まれたあの問い」に導かれたものであるが，他方において，ギリシャ人は「驚嘆」から生まれた問いを発した。そしてこの「驚嘆から生まれた問い」はすべての分野で，出来事と事物の本質への関心を呼び起こした。ギリシャ人は，数を数えたり，計算して解いたりはしたが，それは，合算したり，数を数えて計算するためであるばかりではない。数そのものが，自らの素晴らしい美しい比例関係，関連，対称関係をもっており，この数は，ギリシャ人にとり異常な程度の関心の的となった。しかも，このことが，数学の基礎づけに行きつく。ギリシャ人は，切開したり，焼き付けたり，飲み物を投与したりして，膏薬を当てることを通して，健康にすることを試みた。ギリシャ人は，健康の本質（ギリシャ人は健康を体液が調和していることと理解した）を，病気の本質（この調和が破壊されたことと理解した）を問うた。そしてこのようにして薬学という学問が生まれた。ギリシャ人は，如何にして，個人の生活や共同生活のなかで，もっとも良く生きていくことができるかを考え，役に立つ規則や教えの伝承の中に身を置いた。しかし，ギリシャ人はこれらのことを超えて，「最良の生」や「最良の共同生活」を問うたのである。このようにして，倫理学という学問，国家学が成立した。この種の最も高度の，そしてまた，究極的な問いは，存在するもの全体へと関わるものだったである。真に存在するもの（óntos on）は，存在するものそのものとして，存在としての存在（ens qua ens，on he on）に関わる。このことは，それまでまったく未聞の「第一学問」，存在するものについての根本的な学問，形而上学，に到達する。この存在論のうえに，思惟や発言（論理学）についての教説と認識論の全体が根拠づけられる。

所謂ソクラテス以前の哲学者の哲学の中では，この存在についての教説は，一歩一歩発展した。まず，すべての事物の統一的な根源（生成）（génesis）が問われた。そして，そのようにして原理（Prinzipien, archaí）が問われた。存在するものすべての「エレメント」，元素（stoicheía）に向かった。このエレメントは，それ自身単純なものであるが，もっとも豊かま多様性をになっている。存在している（*ist*）もののみが，存在することができる，つまり唯一の，全体的な，全面的な存在は，全真理を含んでいると考えられた。また，すべての多様性と変転する変化は，ただの仮象にしか過ぎない，と思われたのである（パルメニデス）。さらに，すべては自己を変化させ，そして流れる。その結果，すべては対立から対立へと向かう。すべて流れるもののうちには，すべての対立のうちには，純粋な比例，つまり，ロゴスが，存在が偏在することの根拠として，また存在がすべてに隠され

ていることの根拠としてとどまり続ける，と考えられたのである（ヘラクレイトス）。プラトンやアリストテレスの包括的な存在についての教説の中に，このようなすべてが合流し，また止揚されたのであるが，それは，この二人の思想家をとおして，思考すること，実践的な行為，また技術の創造的な誕生のための或る偉大な妥当性のある基準が，創出されるという仕方，によってである。プラトンにあっては，純粋な思惟のみが到達できる原理やイデアを，この変化の移ろいやすさの世界において，たしかな存在，価値と存続を有するものすべてのモデルたらしめる，という仕方によってである。アリストテレスにあっては，存在としての存在（ens qua ens）から出発しつつ，制作という出来事のひじょうに明瞭で，妥当性のある分析を，技術にも付与する，という仕方によってである。技術は，アリストテレスにとって，いずれにしても，一つの学問なのであり，この学問は，生産として，たしかに移ろいやすいものに向けられてはいるが，しかし，たんなる経験の領域を越えており，原理に関する知（エピステーメー）（形而上学 A 1）に根拠づけられている。この学問は，アリストテレスが強調して定義しているのだが，確固たる所有物となった知識と能力である。この知と能力は，制作することに向けられているが，しかし，［制作する］事物について，明瞭な説明を加えることと結びつけられている。このような技術が，事柄それ自体に関係づけられていること，また同様に，根本知と関係づけられていることは，近代の技術の根柢にあるものであり，また，この近代の技術に充全な力を付与しているものでもある。しかし，アリストテレスによれば，技術は，一定の生産様式でもあり，この点で，技術は，［一方の］不可避に成立したもの（必然，anánke），あるいは，たんなる偶然の出会い（偶然，týche）によって成立するものと，［他方の］生き生きと法則に従って自己自らを創り出すもの，生成するもの（Natur，phýsis，形而上学 Z 7），この両者のあいだにあるものなのだ。アリストテレスによれば，技術という行為は，自然の出来事に全面的に従属したものである。ただ，自然の出来事を誘発させるファクターは，自然の事物そのものの中にあるが，技術を誘発させるファクターは，思考する人間のなかにある。この人間は，一つの目標を眼中にとらえ，計画し，企画し，計算する。ところで，技術は，全面的に自然とのアナロジーで，ある命題を問題とする。 その命題とは，近代技術の原則を，先だって表しているものである。それは，技術は，まず，実験を通して自然に問いかけ，その後で，自然の，事前にはおそらく未知であったエレメントと比例関係を利用して，自らの形成物を打ち立てる，という原則である。アリストテレスは，さらに，技術は，自然を「完成させ」,「補足する」とも言っている。このことによってアリストテレスは,「技術」についての著作が詳論しているように，人間は，技術の助けをかりて，たえず自らに等しいものにとどまる自然を，人間自身の利用や使用へと変形させるのだ，と考えている。このようなことすべてから，その後，以下の原則が生まれた。「われわれは，技術の力故に，どの点で，われわれは，自然によって純粋に不利を被ってきたかを精算する」。わたしは，いかにギリシャ的な存在の思惟を通して，わたしたちの今日の自然科学と技術にとって――わたしはそう思うのだが――基礎的なものとなっている一連の原則が生み出されたかについて，声高に語るつもりはない。「現象は，感性には理解できないものへの視線をもたらす」。さらに，「人は（いかなる理論の構築においても）現象を目にとめておかなければならない」。あるいはまた，わたしたちの近代の自然科学と技術にとって基礎的なものと

なっている格言もそうである。つまり，純粋な思考の結論は，その結論が人間の習慣や具体性をとおして検証されうるか否か，には関わりなく存在している（これは学問におけるナイーヴな神人同型説の克服を意味するが)。

アリストテレスの存在学をとおして，ギリシャ人のもとでもたらされた学問とともに，重要な技術も成立したというのが事実なのだ。私は，クテビオス，アルキメデス，アレクサンドリアのヘロンといった名前を想起することで満足して良いと考える。とりわけ，戦争のための機械，かなりの精確さを備えた測量器具がつくられ，梯子，滑車装置，くさび，ねじ，が発達した。大砲の技術，測量術，オートマチック車，気圧装置，さらに真空に関する詳細な理論に到達し，蒸気の力，空気圧についてもさまざまに記述された。その後，蒸気機関という基礎的な発明に到達することになる近代の発展は，上記のことと結びついている。

近代技術は，これらのことによって，自然の原理，エレメント，経緯の仕方に関する探究を絶えず考慮しながら，ギリシャのロゴスの血を分けた真の嫡子として出現する。このロゴスは，まず紀元前 6 世紀に，精神的な，また行為的な世界克服のまったく新しい道具として立ち現れた。このロゴスの到来とともに，ギリシャの小民族は，オリエントの富裕な家父長制的な，専制的，神政政治的な国家組織の時代―これらの組織にとっては，その権力の展開にもかかわらず，世界の時計は，ただゆっくりと動いていたのだが――に或る新しい喧噪を世界にもたらしたのである。以来，この新しい精神的喧噪は，一時途切れたことはあったにしても，ほとんどとどまることなく，一段と拡張し，ギリシャを越えて西洋世界に到達した。このような古代ギリシャの思考は，静かさをかき乱す理性の性格を持ち，しかも同時に逃れることの出来ない，組織的に世界を克服するエレメントであり，こんにち，私たちの近代技術という形態をとって，諸民族，諸文化のさまざまな思考様式や生活様式となって，全地球上を征服している。それは，雄大であると同時に，もっとも深く動きに満ちた景観となっている。

4.

そのかぎり，近代技術が，ギリシャのロゴスの，実践的なものに向けられた予想外の展開であると理解できるならば，技術が文字どおり果てしなく拡大している事実，わたしたちの生活のかぎりない技術化の事実によって，今日わたしたちを，不安におとしめていることに対して，ギリシャ人にはまったく責任がない。ギリシャ人は，技術の理論のあの拡大以外に，機械は人間の労働力に代わることが出来るという考え方を，明瞭に理解していたが，このことは，アリストテレスの発言，「どのような道具もたんなる命令や予備知識を根拠に，制作することが出来るならば，たとえばシャトルがなんの力も借りずに自らの行程を遂行できるなら，労働とか奴隷はなんら必要としないだろう」（アリストテレスは，或るプログラムを根拠にした機械のオートメイション化を予感していた）からも理解できる。とはいえ，ギリシャ人は，このような考えを，じっさいのところは，偉大なものを目指して追跡はしなかった。彼らは，自分たちの産業や技術を最初期の段階でも戦争の技術や建築の中に持っていた。そして, これらの領域でも或る一定の点にまでだけ発展させた。ギリシャ人は自分たちの技術を，――ギリシャ語を用いれば――利益（Pleonexie）の道

具へとは決してしなかった。このような控えめな姿勢をとった理由は，経済的なものや社会的なものの中にあるばかりでなく，文字どおり，ギリシャ人が技術を知識の様式や制作の様式として精神的に根拠づけた思想そのもののなかにある。 それは，存在するものに対するギリシャ人の感覚のなかにある。神的なものや人間的なものについての考え方の中にある。つまり，ひとことで言えば，彼らの文化理念のなかにある。

このことを，まず否定的なものから出発して理解してみたい。第一に。ギリシャ人は，近代の意識を深く決定づけている二元論を知らなかった。この近代の二元論は，中世末期のノミナリスムスによって準備され，その後，特にデカルトの，思惟スルモノ(res cogitans）と延長ノアルモノ（res extensa）との区別を通して根拠づけられたものである。主観と客観，純粋な悟性の形式と「たんなる」感覚的な知覚（カント），力と素材，形相と質量の二元論を知らなかった。イデアという純粋な存在と変化するものとの間にプラトンが設定した区別は, これとは別種のもである。文字どおり, アリストテレスの質量（hyle）という概念は, 精神から切り離されて存在する, 死んだ質量というものではまったくない。質量（Hyle）は，アリストテレスにおいては，或る関係概念であり，そのたびごとの「素材」として，つねに形相という形成原理と結びつけられている。 ところで，ギリシャの文化理念は, あの（近代の）二元論に代わって存在するものの生ける統一というものを知っているのだ。この統一によって，人間も支えられ，包囲されている。

そこで次に。――ピュタゴラスや晩年のプラトンのもとでは，存在するものの数学化というものが，きわだって行き渡ったが，それににもかかわらず，ギリシャ人は自然についてのあのメカニカルな説明の仕方を認知していない。自然についてのこのメカニカルな説明は，ニュートン以来，自然の出来事の厳密な決定性や予測可能性の思想とともに，近代技術の成功にとりあのような仕方で基礎となったものだ。ギリシャ人にとっては，空虚な無限の空間にある「幽霊のような法則に従った」死んだ身体は，運動というものを知らないものだ。ギリシャ人は，自分が宇宙の中で，つまり，生き生きとした，魂に貫徹された，美しい，まさに聖なる秩序に等しい宇宙の中で包囲され抱かれたものであると感知している。そしてそのようにして，自然もギリシャ人にとっては，主観から切り離された対象の領域ではない。この対象を測量し，意味を与えながら定位することによって「探求する」ような対象ではない。自然（phýsis），は，わたしたちの周囲で，またわたしたち自身のうちで，創造し，形相から形相へと形成しながら支配する。その限りギリシャ人にとり，自然は, わたしたちを包囲し, わたしたちを担う存在である。ギリシャ人も, 自然という「現象」を「探求」し, 原理やエレメントに向かっていく。しかしながら, 全体として, 自然は, ギリシャ人にとり，或る生き生きとした，聖なる，神的な対抗物を形づくっている。さらに，観想（theoría）というものが,「探求」を越えて位置する。theoría，という言葉は, theorós, 宗教的な祭りの使者，という言葉に由来し，アリストテレスにおいては，いまだ，明らかにその根源的な意味において理解されていたが，祭儀的な，聖なる観ること，を表している。このような理由から, 自然の力を「支配する」という近代的な見方は, ギリシャ人には疎遠なものである。このような近代的な見方は，啓蒙主義の時代に，世俗化されて理解された創世記第１章28節の言葉に基礎を置いている。「産めよ，増えよ，地に満ちて地を従わせよ。海の魚，空の鳥，地の上を這う生き物をすべて支配せよ」。そしてその結

果生まれた，自然を感謝の思いも持たずに，搾取の領域とエネルギーの供給者とみなす，という考え方は，文字どおり，ギリシャ人とは遠くかけ離れている。

そして第三に。ギリシャの人間は，無限の空間というものに関係づけられているとは，それほど意識されていない。どのように，その思考と行動において，無限な時間に関連付けられているともあまり考えられていない。したがって，ギリシャ人は，近代の進歩に対する信仰も知らない。この進歩に対する信仰は，キリスト教的-歴史的救済思想が，世俗化された形で，近代の産業技術の世界において，人間が無限に進歩することを確信するものとして，あのような拡張の意思，無限の可能性の王国への決意を付与したのである。この決意こそ，こんにち，科学フィクション-文学の中で表現されている。ギリシャ人が，発展の思想を知っているかぎりは，いつも，最高次の究極（télos）に向かった，いわば垂直の方向で，人間，国家，文化，の上昇が問題の中心となっている。いつも或る最高次のもの，最良のもの，精神的なものの現実化というものが問題の中心となっている。

わたしたちが，ソフィストやデモクリトスやエピクロスのような人物の「原始論的マテリアリスムス」（このマテリアリスムスも近代のそれとは，まったく異なるものだが）の努力を度外視すれば，決定的なことは，如何にしてギリシャ人は，全体なるものについての支配的な意識にもとづいて生を営んでいるか，ということである。人間は自身を全体なるものとして感知していた。ツキュディデスの言っている「自律的な身体」（sóma aútarkes），あの自由で自分自身に定位する人格，これは，その墓碑銘において言われているような，自分をさまざまな方向に向かって優美さや完全な確信をもって保持する人格である。そしてギリシャ人は，全体的なるものとして，自身自分を取り囲む存在するものの全体の中に立っている。そして，この存在するもの全体によって，自分たちが段階づけられたものであると理解している。段階づけられているというのは，すべてを包括する「秩序のヒエラルヒー」という意味においてである。このようにギリシャの存在論は，つねに，同時に，価値論でもある。ホメロスからプラトンやアリストテレスという大哲学者に至るまで，ギリシャ人は，文字どおりきわだって，最高の事物や最高善に関心をもった。人間の「もっとも良い状態」（areté），「最高の生」（eu zen, béltistos bíos），最良の国家，最良の世界，に関心を示した。そして，そのような最良のものは，生や世界において，神的なものへの，また，神的なものの最大の模造のうちにあるものへの，揺らぐことのない確信に従って現実化される。

このようにして個々の人間は，植物的なものから出発して，知覚するものを越えて，精神的なもの，理性的なものへと段階づけられた全体として存在する。理性の有する精神的なものは，人間をその特殊性のうちに，ロゴスを持った動物（zóon lógon échon）として際立たせるものなのである。このようにして，人間の生は，享受と利便のうちにある段階から始まり，（とりわけ社会の中で）行為という段階を経て，観想というもっとも高次の段階へと飛翔してゆく。そして，最高次の幸運の宝といわれるものも段階づけられるのだが，それは，人間の最高の幸福，エウダイモニア，は，最高の善（areté）に従った自己自身のもっとも高次な現実化のうちに理解される，という仕方で，段階づけられるのである。このようなもっとも高次の自己現実化は，精神的なもののうちに，つまり，観想といわれるもの中で生起する。――ギリシャ人にとり，このような最高次の幸福は，力や繁栄

を獲得することである，というように誤解されることは，考えられないことなのだ。このように段階づけられたコスモスである人間は，国家と宇宙という包括的に全体たるものの中で，生を営む。そして，他方，国家の方も宇宙と同じく，ヒエラルヒー的に段階づけられた秩序を為している。最も低い段階でのエレメンタル（初歩的）な生の必要性（anankaía）から魂の中間領域を経由して，精神的な・神的なものへ，というように。国家は，このような自らの段階づけられた全体において，つまり「憲法」において，正義の調和を現実化することによって。宇宙は，秩序づけられていない運動の地上の領域から，天体の領域の純粋な周期運動を経由して，すべてを包囲し動かしている恒星圏，さらにこれを越えて，神性へと上昇することによって，である。この神性は，それ自らは不動のものであるが，第一の動者（primum movens）として，これを求める愛を通して恒星圏の領域と他のすべてのものを動かしている。

技術万能主義が，一度登場すれば，人間を支配し得るのだ，という考えは，上述した秩序の中に生きているギリシャ人にとって，まったく思いもつかなかったものであろう。そしてギリシャ人は，これについて問われれば，野蛮人の魂のみが，そのようなことが出来るのであり，そのような魂は，どのような理性に対しても，どのような悟性に対しても，むき出しのものであり，自己自身の最善のものを知らない魂といえる，と答えたであろう。

5.

技術は，ギリシャの文化意識においては，自らの明瞭で，はっきりと限定された場所を持っていた。根拠について自由に処理し，人間をさまざまな仕方で装備させ，事物を作り出す知識として，技術は，キュクロプスとか洞穴の住人のような存在の粗野な非文化よりも上位に位置する。しかしながら，技術は，純粋な知識よりも下位にとどまる。技術は，生産の様式として，たんなる強制的なものや偶然的なものを越えて，正規の，計画性のある，精神的な形態へと昇格した。とは言え，技術は，自然よりも下位にとどまる。自然は，あの偉大な自己を自ら汲み尽くされることなく創造し，形成する原理なのである。しかも，まさにこの事実が，技術の「場所」を，人間的なものの内部に位置する一つの人間的なものとして，決定したのである。技術は有用なものや美しいものの創造へと貢献したが，そのかぎり，そのことは祝福すべきことではある。また，技術が，美しい藝術作品のなかへ統合されているのも，さらにいっそうの祝福ではある。しかしながら，その力や可能性のすべての点で，技術は，「自然，宗教，これにくわえて教養」，という人間的なものの中での三つの優位したものより下位に位置しているのだ。「教養」は哲学という真理の探究，学問の純粋認識という点において自己を表現する。トックヴィル伯爵の言葉を借りれば，「神の手の外にある何らかの全能というものは危険なものだ」は，たしかにギリシャ人の根本的な確信であった。ギリシャ人がとりわけ忌み嫌ったのは，「個別的なものの反抗」であり，これは，わたしたち人間のあいだでは，周知のように，癌性潰瘍においてはっきりと現れる。技術というものの位置づけが，今日，わたしたちに相当な程度に悲痛にも必要とされているが，その位置づけは，ギリシャ人によって妥当性のある模範的な仕方で完遂されていたのである。にもかかわらず，その際ギリシャ人は，技術の魔力，その脅威，その厳格さ（deinótes）に触れないではいられなかった。そのようなことから，ソフォク

レスは，よく知られた「アンティゴネー」のコーラスの「多くの不思議なもの」（pollá ta deiná）の中で，万物を自己の下に服させる，人間の文化的業績を，国家，文化，言語，思想に至るまで追跡している。このような業績は，ついには，その祝福や冒涜を越えていくが，この詩人の高度な感覚に従えば，道徳的な決断が，最終的な決定を下すことになる。

6.

結論――ギリシャ人は，そのテクネー（téchne），技術の理論によってわたしたちに二重の仕方で生気に満ちた遺産を残した。一つは，わたしたちの近代技術も，その本質は，自分たちのロゴスというものによって，精神的にも理論的にも，ギリシャ人が創り上げたものだ，ということ。この遺産によってわたしたちは，遺産相続人の意義を越えて，文字どおり，この相続人の意義に反してでも，大きな利益を享受してきた。――しかしながら，その哲学的な文化理論において，ギリシャ人はこれと同時に，わたしたちに「技術の使用方法」とも言うべき何ものかを遺産として残したのである。わたしたちは，いま述べたこと［＝技術の使用の仕方］をよく考える必要がある。その時はじめてあのもう一方の遺産［＝ロゴスの伝統］を正しく所有するのである。というのも，このもの［＝技術の使用の仕方］こそギリシャ人の有する驚異的なものだから。つまり，ギリシャ人は，いまだ限られた世界の中で生と人間に苦闘し，経験し，そして，「経験の中の最小のものから，普遍的な認識に即して，最大のものを獲得する」力を所持していたのである。この事実こそ，他の理由があるにしても，わたしたち西洋人が，物質的なものであれ，精神的なものであれ，たえず，新たに，ギリシャの土地に回帰しなければならない，ということの理由そのものなのである。それは，若いプリニウスが，当時ギリシャに旅行する友人に持たせてやったあの警告が教えるところなのだ。「君，考えてみたまえ。君はあの真の本当のギリシャへ送られたことを！その土地でまず人間性，教養，そうなのだ，大地の果実が実り育まれたことを――君が，自由な国家に旅し，もっとも高次な程度において，人間，最高度に自由である自由人たちの土地に旅していることを！最高次に人間である人間の場所へ，また最高次に自由である自由人たちのところへ」。

解　説

＊ここに訳出したのは，前世紀20年代から後半にかけて活躍したドイツの古典文献学者W. シャーデヴァルト（1899－1970））の，1965年の論文である。原題と出典は，以下のとおりである。
Wolfgang Schadewaldt, Die Welt der modernen Technik und die altgriechische Kulturidee, zuerst in: Hellenika (1965), Blätter der Vereinigung der Deutsch-Griechischen Gesellschaften, Heft 65, S. 14-21; dann in: Hellas und Hesperien (1960; 1970), Bd. 2, S. 485-497.

＊ウォルフガンク・シャーデヴァルトは，19世紀末に，医者の息子としてベルリンに生まれ，ベルリンの伝統的な文化環境の中で青年期をおくった。ベルリンでは，U. ヴィラーモーヴィッツ・メレンドルフやヴェルナー・イエーガーという，当時の古典文献学の頂点に立つ顕学の下で学んだ。ケニヒスベルク，ブライスガウのフライブルク，ライプチヒなどで教鞭を執り，1950年，テュービンゲン大学の古典文献学の正教授に就任した。青年期から，シャーデヴァルトの学問的視線は，その本領である古代ギリシャの詩，文学，とりわけホメロスと悲劇作品（特にソフォクレス）の他，ゲーテや，近代の文学，演劇，教育にも注がれている。さらに，ゲーテがそうであったように，多数の論文や講演において，自然科学にも大いなる関心を示し，技術や自然の理解にも注目すべき

見解を提示している。シャーデヴァルトのギリシャ研究の特質の一つは，古代ギリシャの世界観が，近代や現代のヨーロッパの文化の中に，途切れることなく，いわばその「現在」として，生き生きと受領されているということを指摘したことであろう。とりわけ，このギリシャ精神の通時的影響史の強調は，所謂第三ヒューマニズムの牽引的役割を果たし，シャーデヴァルトの師でもあったヴェルナー・イエーガーのパイデイア（文化・教養）の形成と展開を中心としたギリシャ観と異なる点であると言われる（Hans Krämer, Wolfgang Schadewaldt und das Problem des Humanismus, 2005, in: Wolfgang Schadewaldt und die Gräzistik des 20. Jahrhunderts, hrsg. v. Thomas Alexander Szlezak unter Mitwirkung von Karl-Heinz Stanzel, Hildesheim/Zürich/New York, S. 77-91）。ここに訳出した，1965年発表の論文も，そのような彼の学問的視点の特質を充分に，また典型的に表明している。特にアリストテレス以来哲学の主要なテーマの一つを形成するようになった技術，テクネー，の近代的な展開に，ソクラテス以前の哲学者，文学者，またギリシャ哲学の主要な思想家，プラトンとアリストテレスの哲学という本来の原点に戻って，考察を加えたものである。シャーデヴァルトの提示する近代技術観は，産業革命から，本論文の発表された20世紀半ばほどの時点までの状況を見据えての発言であるが，21世紀のわたしたちの経験している，さらなる科学技術の新しい展開に対しても，有効であろうか？とくに興味深く注目できるのは，オリエントの地域においては，技術は有用性への関心から展開・進展したが，これとは異なり，古代ギリシャにおいては，技術は，「文化と人間存在の構造全体」を視野に入れて発生・展開したのであり，このことが人間の自由を保持する，という帰結を生み出している，という指摘であろう。「イリアス研究」「ゲーテ研究」「ホメロスの世界と作品」などの著作の他，多くの論文が二巻の論文集「ヘラスとヘスペリア」（1960；1970）に収録されている。訳者は，ギリシャ宗教史とヒューマニズムという視点から，2013年，シャーデヴァルトの論文，デルポイの神と人間性の理念（1965年），を訳出し，若干の補足を記した（茨城キリスト教大学紀要第47号，2013年）。また，シャーデヴァルトのビブリオグラフィー，及び関係文献をも提示した。

要　旨

“Mit ihrer Theorie der techne, Technik, haben die Griechen uns ein lebendiges Erbe in doppelter Weise hinterlassen. Einmal indem sie das Grundwesen auch unserer neuzeitlichen Technik von ihrem Logos her geistig und in der Theorie konstutuieren. Mit diesem Erbe haben wir weit über den Sinn des Erblassers hinaus, ja gegen den Sinn des Erblassers gewuchert.---Allein in ihrer philosophischen Kulturidee haben die Griechen uns zugleich so etwas wie eine Gebrauchsanweisung der Technik hinterlassen, und auf diese müssen wir uns besinnen, um jenes andere Erbteil erst recht zu besitzen. Denn das ist das Wunderbare an jenen Griechen, wie sie in ihrer noch beschränkten Welt das Leben und den Menschen erlitten, erfahren haben und die Kraft besassen, aus einem Minimum an Erfahrung ein Maximum an allgemeiner Erkenntnis zu gewinnen. Das ist, unter manchem anderen, der Grund dafür, dass wir Abendländer, sein es körperlich, sei es geistig, immer wieder von neuem nach Griechenland heimkehren müssen, jene Mahnung des juengen Plinius beherizigend, die er einem damals nach Griechenland reisernden Freunde mitgab: <<Denke daran, dass du in jenes wahre und echte Griechenland gesandt bist, in dem zuerst die Menschlichkeit, die Bildung, ja selbst die Früchte der Erde entwickelt wurden; dass du zu freien Staatswesen gesandt bist, zu Menschen, die im höchsten Grade Menschen, zu Freien, die am meisten frei sind: *ad homines maxime homines. ad liberos maxime liberos.*>>”